都市×知

音楽都市のエコシステム

Music City Eco System

ミュージックシティエコシステム

音楽都市インタビュー

High-Life

公益財団法人ハイライフ研究所

■インタビュー　南原尚幸氏

日時：2023 年 11 月 22 日（水）10:00～12:00

場所：六本松 蔦屋書店（福岡）

【ヒアリング対象者プロフィール】

南原尚幸（なんばら ひさゆき）

カルチュア・コンビニエンス・クラブ（株）

蔦屋書店本部 第 4 運営部　部長

六本松 蔦屋書店　館長

1974 年生まれ、福岡県福岡市出身。大学卒業後、カルチュア・コンビニエンス・クラブ（株）に入社。九州で 8 年間音楽バイヤーを担当したのち、東京本部で音楽 MD を 3 年経験し、2012 年地元福岡へ戻る。2017 年 9 月に六本松 蔦屋書店オープンと同時に館長に就任。福岡がもっと日常的に音楽を感じられるまちになるように、会社という垣根を超えて「面白いことやろう！」という人たちと一緒に、福岡の音楽を盛り上げていきたいと思っている。2023 年には福岡音楽都市協議会で人材育成部会担当し、BiSH の音楽プロデューサーとしても知られる松隈ケンタ氏とゴスペルシンガーの寒竹麻衣子氏らと共に子どもたちへの音楽教室「スクール・オブ・ロック in 草ヶ江 SHOW 学校」を手掛けた。

[六本松 蔦屋書店]

2017 年に 9 月に九州大学六本松キャンパス跡地再開発エリアにオープンした複合商業施設「六本松 421」内にある九州初出店の蔦屋書店。

古き街並みと新しいカルチャーが交差する六本松で「食」「旅」「こども」「アート」「ファッション」「エンタメ」をテーマに、

コンシェルジュが厳選した本や雑貨、音楽などを通じて、人生を豊かにする「定番」となるような、モノやコト・アイデアを紹介。

訪れた人が、その先何度でも利用したくなるような、「究極の普段使い」ができるお店を目指す。

プロとしての自覚を持つアーティストも、

音楽を教えるプロとしての講師も、どちらも育てなければならない

――――――音楽都市協議会では昨年人材育成のご担当だったということですが、どのような人材の育成でしょうか。

南原：ざっくり言うと音楽従事者です。「音楽従事者が福岡で食べて行けるためには」というようなテーマでやっていました。やはりまだまだ音楽業界には東京一極集中がありますから。人材育成部会には、音楽プロデューサーの松隈ケンタさんはいま福岡在住なので部会に入っていただいていますが、日本でもトップクラスのプロデューサーなのに「福岡だけの仕事では僕でも食べていけません」と話されたのを当時聞いて、結構衝撃的でした。海外や東京の仕事が無いと、福岡だけではなかなか食べていけない。スタジオや飲食店の経営など多岐に渡って活動しながらも、“福岡だけでちゃんと食べていける方がいいな”という話になったんです。無理に東京に行く時

代でもありませんが、やはり東京に行かないと仕事がなかなか無いという状況は、ここ数十年変わっていないんだということに気づきました。

――――――音楽従事者の育成と言った時、どのような課題があるのでしょうか。

南原：例えば、ミュージシャンに結構、著作権の知識がなかったりとか、アーティストとして自分の身を守ることをあまり勉強していなかったりとか……もちろん、すごく勉強されている方もいますけれどね。

あと指導者ですね。教える側ってなかなか世に出てこないので、ミュージシャンやアーティストよりも指導者の方が少し下に見える。給料やギャラの面でもそうです。音楽における指導者のプロも育成していければいいねという話もありました。

――――――ここでいう指導者とは、どういう指導者ですか？

南原：ボーカルのレッスンをやる人とかギター弾きとかです。海外では、指導者はミュージシャンが本当に師と仰ぐような感じの存在で、例えば、ドラムで言うと８ビートだけめちゃくちゃ上手い人がいて、そのテクニックだけをプロのミュージシャンが習いに行くとか、それくらいしっかりと地位が認められています。

僕のイメージですが、ミュージシャンになる夢が破れたから音楽を教える側に回る、というのはちょっと良くないなと思っています。なぜなら、海外では最初から指導者としてのプロを目指しているみたいなところもあるんです。アメリカでは「アレクサンダーテクニーク」という指導方法として確立しているものがあって、例えば、日本のバンドの「indigo jam unit」のドラムの清水（勇博）さんは活動休止後ニューヨークに渡って、そのレッスンを 1,600 時間以上受けて、ちゃんと資格を取って、いまニューヨークでレッスンをしています。それぐらい育成する側の教育というかプログラムがちゃんとしている。日本にも有名な講師の方はいらっしゃると思うんですけど、音楽で食べていけるってことでは、表立ってすごいよねっていうところまでの世間的な認知は無いかなと思います。

教え方と言うのは学ばないとなかなか出来ないですし、教える技術は自分の技術の向上につながるそうです。参考図書に『音楽家を成長させる教える技術』というアメリカの本があります。教えることで自分の音楽も高められるというところを日本ではあまり考えられてないので、まず福岡でできたらいいよね……というようなことをディスカッションしています。

ミュージシャンにとっては自分の技術の向上と副業が、講師にとっては自分たちの地位を上げていくことが、教えるプロになるエッセンスではないかと感じました。

ゴールイメージ（こうなりたい）は何か。
何が１位だったら「福岡は音楽が盛んだよね」と言われるようになるか

――――――人材育成部会ではどのような活動をしていたのですか。

南原：人材育成部会で僕は当時リーダーだったので、みんなに宿題を出したんです。宿題の内容は、まず、「ゴールイメージ（こうなりたい）は何か？」という成果目標を考えることです。次に、「どの分野をターゲットにするのか？」。教える側をターゲットにするのか、エンジニアなのか、ミュージシャンなのか、子どもたちなのか、どこ対してやるのかを考えてもらいました。

僕はコンセプトをつくるのが好きなので、音楽都市協議会のコンセプトを「カケル」にしてみました。掛け算という意味だけではなく、音楽を再生することを「カケル」と言いますよね。福岡では音楽を流すことを「かけちゃらんね」

と言います。で、「何か音楽ばかけちゃらんね」をキーワードにして、例えば音楽とアートを「カケて」何か出来ないか？自らの未来を「描ける」サポートプランが出来ないか？子どもたちの未来に「架ける」には？など、「カケル」をダジャレのように文字遊びしたら、「カケル」はキーワードになるなと思いました。このコンセプトは若干お蔵入りになっていますが（笑）。

それから、「こうなりたい」と言うのが無いと音楽都市協議会の成果が分かりにくいので、こうなっていたら「福岡は音楽が盛んだよね」って思われるんじゃないかということも書き出しました。

例えば「音楽従事者の人数、所得が全国 1 位」とか、子どもの教育をすることで「子どもの絶対音感率が全国 1 位」とか、お年寄りの問題もたくさんあるので、「音楽で元気になって健康寿命が全国 1 位」とか、どんどん東京に行ってしまうので、住んでいることにこだわりたいから「人口におけるミュージシャンの在住率が全国 1 位」とか、台湾や中国、韓国に近いので、玄関口として「アジアのマーケットシェア全国 1 位」とか……というように順位にすると分かりやすいので「1 位」を掲げたり、福岡は屋台がたくさんあるので凄いサウンドシステムを搭載した屋台があって、ジャマイカみたいに街中に音楽と食べ物があふれているまちにしたいとか、そういったゴールイメージがある中で、人材育成部会はどうするか？という話をしたんです。

さらに、音楽の仕事はいろいろあって、ミュージシャンだけでは無く、最近はレコード会社もきつくなっている状況なので、どこから育成するのか？そもそも僕らのチカラで育成できるのか？というのもあるんですけど、音楽関係者に共通する食べるために必要な知識やマインド、福岡でどうして行くのかみたいなことを協議出来たらいいですねという話をしました。

その中で、先程お話した海外では「教える」事例がたくさんあるという話や、トークイベントなど知ってもらうための手法としてどんなことが考えられるかを次回までの宿題として投げました。

そして、次の部会で、僕が出した課題が「音楽従事者が福岡で食べていくには？」です。具体的にいくつかアイデアを出しました。例えば、先日うちの店にバンドマンに集まってもらったんですが、著作権の知識のかけらも無さそうな人がたくさんいました。純粋に音楽だけをやって来た子たちも自分の身を守るために、自分たちがつくったものの権利は自己管理できた方がいい。なので、音楽都市協議会に参画されているサウンド・エンジニア戸田さんは音楽の権利関係にも明るい方なので、バンドマンのための著作権講座を開いてみたらいいのでは、とか、「教えるプロになるために」をテーマに参考図書をメンバーに配って読んでもらったりしました。

日本の音楽教育は少し偏っているのではないか。
子どもの頃から豊かな音楽に接するような支援があったほうがいい

南原：中でも僕が一番やりたかったのは「子どもたちへの音楽教育」です。僕は映画「School of Rock」のようなものがあったら良いといつも思っていました。小学校の音楽の授業はリコーダーやピアニカまでしかなくて、後は合唱というシンプルものです。いろいろ調べたところ、イギリスでは 20 種類以上の楽器を体験出来ますし、財団法人などの支援団体が機材を寄付してプロのミュージシャンが教えたりもしています。アメリカには「リトルキッズロック」というのがある。海外では子どもの頃から豊かな音楽体験がなされているのに、日本では少し偏った教育になっている。先生に関しても、ピアノが弾ける先生がいればいいけど、担任で音楽に明るくない先生もいるので、プロが教える場面があった方がいいのではないかということで、去年取り組んだのが「スクール・オブ・ロック in 草

ヶ江 SHOW 学校」という事業です。

近所にある草ヶ江小学校とは蔦屋書店でも社会科見学で交流させていただいていましたので、「草ヶ江小学校で音楽の授業が出来ませんか？」と相談したところ快諾いただいたので、バンドマンやエンジニアを連れて行って授業をやりました。ヤマハさんの協力も得て、バンド演奏が出来る機材を用意し、ギターは 20 本くらい持って行き、小学 6 年生 150 名を対象に、授業の 5～6 時間目を使って体育館でやりました。その時の模様は PV にしました。（スクール・オブ・ロック in 草ヶ江 SHOW 学校 https://mccf.jp/column/24/）

この映像は卒業記念作品として提供させていただきました。教えながら録音も同時に行って、音源はそれらをつないだものになっています。バンドマンにも多数出ていただきましたが、彼らにも今回教えるということを体験してもらい、ちゃんとギャラをお支払いして、教えることによって対価を得てもらっています。福岡は「タダでやってくれ」ってところが多いんですけど、それは悪しき習慣なので、ちゃんとギャラを払うという習慣をつける。そして、ミュージシャンも自分から請求することも重要だと思います。お金の話は何かいやらしくなりがちですけれど、海外では普通にやっていると思いますから。

子どもたちは多分、ここで初めてドラムを叩いたり、ギターを「ジャ～ン」と鳴らしたりという体験が出来たと思います。育成と言うより“体験”したことによって、この先の選択肢が広がったり興味を持ったりすることが、何もしなかった時よりも確実に増えるだろうという期待も込めて、あらゆる楽器を用意させてもらいました。みんな順番に並んで楽器を鳴らして……ドラムの行列がいちばんすごかったですね。その鳴らしているところをちゃんと録音したり録画したりして、それをつないで音源にしました。彼らは YouTube 世代なので、こうやって YouTube に上がること自体もすごく喜びになるので、体育館にドローンを飛ばして PV の撮影を行いました。それもこれも名プロデューサー松隈さんのアイデアと彼のエンジニアチームが居てこそのミラクルな力技でした。非日常の体験が 2 時間で出来たんじゃないかなと思っています。今後はこれを繰り返していくのか、また違うやり方にするのかまだわかりませんが、すごく意義があったんじゃないかなと感じています。

最初は本当に「エレキギターを爆音でかき鳴らしたいね！」という話だったんですけど、松隈さんとか、プロのミュージシャンとかエンジニアがいらしたんで、「じゃあ、課題曲を出して、それを弾けるようになろう」ということになりました。絶対にハードルが高いよなと思ったんですけど、まさかこの形で締めくくれるとは思いませんでした。今回、松隈ケンタさんに現場の仕切りをやってもらたんですが、一流のプロデューサーは子どもたちを一発で仕切れるんですね。「こっちに分かれて、こっちに来て！」、「はい、もう喋らない！」とか……流石だなと思いました。

楽曲はフーファイターズの「プリテンダー」という曲です。当日は本当にぶっつけ本番で、子供たちは当日、この曲の元の音源を聞いたぐらいな感じです。松隈さん流石だなと思ったのは、元ニルヴァーナのドラムのデイヴ・グロールがこのような取り組みを応援するタイプの人なので、「これが YouTube に上がったら、デイヴ・グロールが、『なんか福岡でスゲーことやってんぞ』みたいなことになったら最高じゃない！」って言って……まだなっていないんですが……松隈さんはこの楽曲の選曲の意図があったんです。

濃密な 2 時間の授業はとても達成感がありましたが、結構しんどかったです。みんな燃え尽きちゃいました（笑）。もう少しコンパクトな形で継続できるように、各楽器のパートに分けていくとか、150 人も相手にしないで、1 クラスだけにするとか考えたいですね。

あと、YouTube にアップするまでのハードルもなかなか高かったんです。学校の許可を得るのが大変で……最初は授業だけの話だったので、YouTube にアップしたいというと、「ちょっとぼかしてくれ」とか、顔出し NG の子

もいるとか、だいぶ時間がかかってようやくアップしました。そういったハードルもあるんだと感じました。でも、これが一つのパッケージになったらいいなとは思います。

音楽に関わる人々はミュージシャンだけでなく、
エンジニアやクリエイティブもいる

――――――ミュージシャンだけではなく、エンジニアや PV をつくる人がいるというところまで、知ってもらいたいということだったんですね。

南原：そうですね。サウンドエンジニアとかプロデューサーとか、PA を連れて行ってミキサーをいじってもらったり……講師もいれば、楽器屋さんとしてヤマハミュージックが来たとか……何か一つやるのにもいろいろなところが関わって、いろいろなプレイヤーが必要だなというのは感じてもらえたかなと思います。やっぱり、みんなミュージシャンばっかり見ちゃうんですね。でも、成立するためにはそれを支えるさまざまな人がたくさん関わっています。子どもたちが、今後、ミュージシャンになるとかエンジニアになるとかという選択肢を普段の生活では発見できないので、こういった場があるといいなと思っています。

福岡市からすると音楽都市協議会を結成した目標は音楽産業の活性化なんですが、一方で、ミュージシャンにちゃんとギャラを支払うとか、ミュージシャンが教えるという部分も必要だと思います。人材は福岡にもいるので、なんとか福岡から出ずに食べていけたらいいなと思いますね。

一方で、僕はよくバンドマンや新人のバンドを応援してるんですが、「来年東京に行きます」っていうバンドが出てくるんですね。「福岡で出来るやん！なんで東京に行くの？レコーディングも出来るし」って言うんですけど、彼らは、「いや、東京を経験しておきたいんです」って言う。一流の場所に行って戦うということは重要です。やはり刺激が福岡とは全然違っていますから。そういう意味では、東京は重要な場所なんだろうと思います。けれど、戻って来て活動できる土台、音楽都市としての受け皿はつくっておかないと、彼らが戻って来ても刺激がない。刺激をつくるにはやはりアジアだなと僕らは思っています。アジアに向けてどれだけコネクションと発信が出来るかということをやって行きたいですね。

――――――音楽を学べるスクールについてはどのようにお考えですか。

南原：専門学校で教えていることは、現在のニーズにそぐわないのでは、という話は、松隈さんも教える側でもあるので出ています。音楽の専門学校を出てもなかなか就職先がないというのではなく、福岡でももっと活躍の場が増えたり、そのために使える技術をもっとアップデートしていかないといけないんじゃないかなと思います。

――――――「School of Rock」を今年は実施しなかったのには理由があるんですか？

南原：第 1 回目に全部盛りでやって燃え尽きたというのが正直な理由です（笑）。それから、皆さん超忙しいので、これをもう一回再現しようとすると……まあ、同じことは出来ると思うんですけど……そんな話に至ってないみたいですね。やって欲しいという声が何校かあるみたいですが……。

音楽をつくる人の流れを断ち切らないようにしたい
次世代へのバトンタッチができるようにしたい
地域の子どもたちにプロが音楽を教える仕組みには、
もっと企業協賛が当たり前になってほしい

――――――企業としての地域貢献をどのようにお考えですか。

南原：僕の場合は音楽が好きだったので、音楽の仕事をしている延長でお声掛けいただいたことはすごく嬉しくて、出来ることをやろうと思っています。そこはお金ではないですね。まあ、月 1 回とか、2～3 か月に 1 回集まって企画化するのであれば大丈夫です。実施当日の労力がかかるので、「企画をつくったお金をください」って、今回初めて言えました。やはりある程度動いた分の対価はあるべきだなとは感じています。知り合いのバンドに出てもらって、「ギャラは無いけど」っていうのは、やっぱり失礼じゃないですか。

――――――蔦屋書店としてはどうですか。

南原：ここ（蔦屋書店）に還元出来ていることはたくさんあります。時間を使っているので企画料ももちろんお店に入れていますし、ミュージシャンがインストアイベントをやってくれたり、松隈ケンタさんの出版イベントをしたり、それこそ繋がりがたくさん持てます。そういう意味では、Win-Win ではあるんですけど、そうじゃない立ち位置の人だったら、ちゃんと対価は払わないと…そこで食べて行くというのも重要だろうと感じています。

先程も言ったたように、アメリカでは慈善団体が公立の中学、高校に楽器を無償提供して、プロのミュージシャンが定期的に教えに行くという理想的なことをやっている。そういったものが日本でもっともっと普及していくには、地域の企業が協賛することが当たり前になって欲しいと思います。

ちなみに、トヨタカローラ福岡が僕のイメージに近いことをやっています。「KEY10 Music（キーテンミュージック）」といって、地元のオーディションで 10 組のミュージシャンを選ぶイベントです。博多弁で「聞いてください」は「聞いてん」というので、名称はそれにかけています。オーディションに受かった 10 組は必ずコンピレーション CD をトヨタカローラ福岡がつくって配布します。車と音楽って相性がいいですしね。普及したら CM に起用したりするという活動をずっとされていて、すごく理想的だと思います。社長の金子さんも元々バンドマンだったんですが、めちゃめちゃいい取り組みだなと思いますね。CD ジャケットも、福岡のイラストレーターを使ったりしていて、すごくいいサイクルが回っています。

――――――蔦屋書店自体が企業として地域に貢献する事例はありますか。

南原：グループ会社のカルチュア・エンタテインメントでは、映画で「TSUTAYA CREATERS' PROGRAM FILM」と言うコンペを主催していて、受賞者に映画をつくってもらっています。蔦屋書店も、地域に密着してまちづくりをやっています。地域貢献的な目線は増えてはいるのですが、音楽にフォーカスした活動はあまり無いですね。

――――――音楽とアートとの連携はお考えですか。

南原：アートと音楽とかのカルチャーはすごく親和性が高いので、今度、ここ六本松でそういったアートサーキットみたいなのを始めたいと思っています。六本松界隈は飲食店と個人店がものすごくパワーがあって個性的なので、そこを活かしたいですね。僕はカルチャー全般をやりたいので、この 2、3 年で音楽もアートもフードも、まち全体をカルチャーが盛んなまちだっていうポジションに育てて行きたいんです。そういう意味では、音楽も欠かせないし、

アートも欠かせないと思います。

昔、レンタルのコーナーでプッシュしていたバンドを聴いていた子が
そのバンドのメンバーと一緒に始めた、という話。めちゃくちゃ嬉しい

――――――南原さんの名刺に、「ロックンロール新世紀」と書いてありますが、これはなんですか。

南原：これは僕のライフワークというか、音楽の MD をやっていた時に、かっこいいバンドを集めたレンタルコーナーとイベントをやっていて、それを「ロックンロール新世紀」と名付けていました。当時は「毛皮のマリーズ」とか「ボヘミアンズ」とか「キング・ブラザーズ」とか、ホンモノのロックンロールバンドを全国の TSUTAYA に並べてこれでもかとプッシュすることに燃えていました。

先日、すごく嬉しいことがあって……当時、「毛皮のマリーズ」をやっていた志磨遼平さんがいまは「ドレスコーズ」というバンドをやっていまして、先日その福岡公演を見に行ったら、ギタリストが 20 代のすごい若い子だったんです。ライブ終わりに挨拶したら、ボーカルの志磨さんが「このギターの子、小学校 4 年の時に千葉の『ロックンロール新世紀』のコーナーで毛皮のマリーズの CD をレンタルしてからギターを始めて、いまバンドにいる」んだっていう話を聞いて、めちゃくちゃ鳥肌が立ちましたね。「そのコーナーでレンタルしました。そしてバンド始めました」という話は何件か聞いたことはあったんですが、そのバンドのメンバーの中に入っているというのは、めっちゃすごかったですね。

――――――それは嬉しいですね！もうひとつ、名刺にある「よか音♪」についても教えてください。

南原：「よか音♪」は福岡市にある CD ショップの組合です。いまコロナで止まっているんですが、タワーレコードや HMV、地元のインドウ・ミュージックなどが毎月集まって、来月どのアーティストを推すかなどの会合をしていました。地元福岡のアーティストをプッシュしようとかを結構ちゃんと主張して、多数決で決めたりしていたんです。

福岡では横の繋がりはすごくあります。レコード店は店長がどんどん変わって行くので、オリジナルメンバーで残っているのは地元のインドウ・ミュージックと僕ぐらいしかいないんですが、垣根が無いのはすごくいい文化です。

――――――レコードや CD などというモノがあるからこその体験もありますね。

南原：ネットで見る世界って画面の中に限られているじゃないですか。でも、お店の中では視界に入るものが全て選べる。偶然と出会うという点ではお店の優位性があると思います。モノを手に取って、質感にリアルに触れることは一生デジタルには勝てるだろうなと思います。多分、その最たるものがレコードですよね。サブスクでも聴けるのに、物質として購入して聴くこと自体が一つの儀式、行為として楽しむものになっている。普通に気軽に聴けるものをわざわざ面倒くさいやり方で聴くというのは、よっぽど好きなものに対してでなければと出来ない。より好きなものが明確になるんじゃないかと感じます。豊かな時間だなと思います。

――――――視界の中にいろいろなものがあってこそ出会いがあるということは無くしたくないですね。

南原：結局、スタッフが「めっちゃ良いんですよ。ちょっと聞いてみてください！」という人の信頼感による関係とか、「じゃあ、こっちのは？」とか質問できる関係とか、「このギタリストはこっちにも参加してますよ」という人からの言葉とか……やっぱりそういう生きたコミュニケーションは、なかかなかデジタルや AI じゃ出来ないですよね。それが出来るようになったら、もう潔くさよならするしかないと思います。

音楽は文化だが、今後は社会的な課題にも
音楽の切り口が活かせる

――――――音楽都市協議会でやろうとしていることも、まちという広く視野に入る中で音楽と出会う取り組みですね。

南原：音楽は文化ですが、たぶん今後は社会的な課題……高齢化問題とか、そういったところにも音楽の切り口が活かせるのではないかという気がします。ハイレゾなどのすごくいい音質で、昔の昭和歌謡とかをシニアの方に聴いてもらうと、脳が活性化して認知症の予防になるという研究結果もあります。医療的な側面でも使えるのではないかということですが……まあ、いい音で聴ければ、それに越したことはない。そう言った意味では、そこで記憶が鮮明に蘇るとか、そういった効果があるといいなと思いますね。

――――――「こうなりたい」を挙げておられた中に、「まちで鳴っている音楽が異常に高音質」という目標はいいでうね。

南原：そうですね。信号機の音とかもですね。福岡音楽都市協議会のボス深町さんはかねてから「福岡でMUSIC CITIES CONVENTION を日本で最初に開催する」ということを目標にされています。私も大いに賛成です。そのためにはもっともっと福岡って音楽が凄いよねと言われる実力と実績も伴っていなければならない。食べ物が美味しいだけじゃなく、音楽・音的にもいろいろ実装できている土壌にならないといけないですね。

――――――若手の人たちが、「福岡のここに出られたら認められる」というような目指す場所はあるのですか。

南原：「糸島 SUNSET LIVE」は福岡中の人が好きな音楽フェスなので、そこに出れたらっていうのはあると思います。もっとバンドマン寄りでは「トライアングル」というイベントはパンクバンドとかが目指すところです。その一段階前に「TENJIN ONTAQ」というライブサーキットがあり、120 組ぐらいが 8 会場で 2 日間ライブをサーキットするんですが、そこに出て最終的に「トライアングル」に出るというのがステップになっているような気がします。

「トライアングル」では、イベントの時のセキュリティとか運営とか警備とかを若手のバンドマンがやるんです。ステージ上のバンドマンが、「お前らも早くここに登ってこい！」みたいな。わかりやすくて、すごくいいなと思っています。そういう意味では目指すところは結構、明確にあると僕は感じます。

――――――地元にそういう目標値があるのはいいですね。

南原：そしてメジャーデビュー、という目標がかつてあったと思うんですけどね。いまは個人で、自主レーベルでやるアーティストが増えて来ているので、小回りの利く、マスコミの宣伝が必要ないやり方もあるかもしれませんね。一長一短はありますが、自主レーベルで Spotify とかに簡単に上げられますから、地球の裏側で聴かれている可能性もあって、何かのきっかけで急にお声がかかるとかいうチャンスは広がっていると思います。

一方、メジャーな音楽はみんな知っていた時代から考えると、情報やが多すぎて拾い切れないという問題もあるかもしれません。CD ショップに並んでいた時の方が探せるじゃないですか。何となくカテゴリーで分かれているとか、新入荷はこれかっていう感じで……。ネットになると自分で掘っていかないと辿り着かなかったりしますが、マニアックに深く掘りたい人には、知らない世界の音楽もたくさん聴けるので羨ましい時代ですし、アーティストも曲ができた瞬間に上げていけばいいので、そのスピード感はすごいですよね。

――――――そのような部分を音楽都市協議会で引き上げて行くという構想はありますか。

南原：そこにフォーカスしてということはまだ無いですけど、何かしら目に触れる、耳に触れる機会は増えていった

方がいいので、「OTOJIRO」にアーティスト登録してもらって、マッチングするなどはできると思います。

――――――目指すところはいろいろあると思いますが、南原さん的にまず一番に目指したいと思っているところはどこですか。

南原：「人口におけるミュージシャンの在住率」ですね。あと、僕もだいぶ健康が気になっているので、「お年寄りが音楽で元気になり健康寿命が全国 1 位」です（笑）。

＜参考＞

福岡音楽都市協議会の概要

[福岡音楽都市協議会]

福岡音楽都市協議会（MCCF）は、「福岡を日本・アジアを代表する音楽都市へ」をビジョンに掲げ、2021 年 4 月に設立された任意団体。音楽の分野において、幅広いジャンルのアーティストや、市民、団体によって多彩な活動が育まれ、都市の大きな魅力となっている福岡で、「音楽」を関連産業や観光、さらにはまちづくりの観点から活用・振興を図るため、市内で音楽関連の活動等を行う事業者・個人などをはじめとした、さまざまな立場の人が横断的に交流し、育成を行う組織。

＜福岡音楽都市協議会メンバー＞

・会長　福岡市文化芸術振興財団 理事長　石原 進（JR 九州特別顧問）

・顧問　福岡市 市長　髙島 宗一郎

・監事　福岡市経済観光文化局 理事　吉田 宏幸

・理事　日本ゴスペル音楽協会 理事　寒竹 麻衣子

・理事　NPO ティエンポ・イベロアメリカーノ理事長　サンティアゴ・エレーラ

・理事　公益財団法人九州交響楽団 専務理事　本田 一郎

・理事　九州大学芸術工学研究院 准教授　城 一裕

・理事　筑前琵琶保存会 会主　寺田 蝶美

・理事　福岡ミュージックマンス主催者会 会長　深町 健二郎

＜事業内容＞

① WEB メディア事業：キュレーションメディア「OTOJIRO mccf.jp」の活用

- 音楽イベント等の情報発信
- データベース登録（福岡のアーティスト、音楽関連事業者）
- ビジネス向けページの設置
- 音楽 MAP の設置(予定)

② 人材育成事業

- データベース登録者向けセミナー：クリエイティブセミナーの実施
- コライティング（共同楽曲制作）：「BEYONDERS」イベントを開催し、福岡の若手バンド×タイおよび台湾のインディーズバンドのコライトセッション等を実施
- 小学校での特別授業：「スクール・オブ・ロック in 草ヶ江 SHOW 学校」
- 人材育成プログラムの実施

③ 業者間・異業種交流事業

- 会員、異業種交流会：「FUKUOKA MUSIC SUMMIT」、「ミートアップパーティ」実施
- ビジネスマッチング：データベース登録アーティストの各種イベントへの斡旋

④　まちの賑わい事業

・「FUKUOKA STREET LIVE」：まちなかのオープンスペースでアーティストパフォーマンスを 237 ステージ実施

・「FUKUOKA STREET PIANO」：ベイサイドプレイス博多、ソラリアプラザに設置

・「サウンドスケープ」：九州大学芸術工学研究院と連携した「音環境デザイン」の社会実験

※参考までに一般社団法人 We Love 天神協議会所管の「Fukuoka Music Month」：福岡で 9 月に開催される 5 つの音楽イベント（「糸島 SUNSET LIVE」、「九州ゴスペルフェスティバル in 博多」、「FUKUOKA ASIAN PICKS」、「MUSIC CITY TENJIN」、「NAKASU JAZZ」）を「Fukuoka Music Month」として集結。広域集客などによる街の賑わい創出と音楽産業の振興を目指す。

→音楽による都市ブランディングのコンサル会社「サウンド・ディプロマシー」の目に留まり、メルボルンの「MUSIC CITIES CONVENTION」で福岡の取り組みをプレゼン。2026 年の福岡開催を目論んでいる。

※その他の事業

・「福岡音楽都市協議会支援自販機」をコカ・コーラの協力のもと 3 台設置：売上金の一部を音楽の文化・産業振興、まちづくりに活用

「都市×知」

音楽都市のエコシステム

Music City Eco-system

＜研究メンバー＞

服部 圭郎　　龍谷大学政策学部 教授

紫牟田 伸子　　株式会社Future research Institute 代表

水本 宏毅　　株式会社読売広告社 都市生活研究所 エグゼクティブリサーチディレクター

榎本 元　　公益財団法人ハイライフ研究所 主席研究員

＜表紙デザイン＞

伊藤 愛　　株式会社ソフトマシーン

発行　2024年7月

発行所　公益財団法人ハイライフ研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座1－8－14 銀座YOMIKOビル8F

TEL03-3563-8686（代表）Fax03-3563-7987

https://www.hilife.or.jp/

©公益財団法人 ハイライフ研究所

©株式会社Future research Institute